



館林記全

秋元文庫

42	種類
8	部
	冊





館林記初編



夫人五百六代後奈良院御宇元祖ヨリ享録元戊
子七月八日夜稻荷新丸衛門の告ニテ赤岩山城
守照光十八年の城主也天文^{十四}乙巳四月卒弘治三
丁巳二月朔日嫡子但馬守照康拾年之内城主永
録九八月廿三日病死嫡子文六照景五年拾四代
館林之城主家臣諸野因幡助小曾根玄番允政義
後見文篁元庚午十二月七日長尾但馬守十四年
持越後輝虎甥文六姉繁丸山丹後守天正十一癸

未五月小田原氏直八年之内城主也
但之城代
小条美濃守差置天正十八庚寅榊原小平太康政
同年ヨリ寛永十五年迄四拾九年之内城主

井田十九衛門 中根善次郎 原田権九衛門

寛永十五戊寅御本丸御代官松平八太夫二拾年
天正十八ヨリ寛永十五迄四拾九年之内榊原領
主

御番太田系備前守

正保元甲申松平和泉守拾八年今井嘉兵衛水野
惣右衛門杉戸次郎右衛門寛文元享也館林様二

十三年

大久保隼之助 金田宗八郎 金田遠江守

天和三亥七月崩也無城ニテ十九年天和三迄百

五十六年享禄元子ヨリ元禄十四已迄百七十四

年也享禄元子ヨリ寛政十一迄二百六拾七年宝

永四亥六月十五日松平出羽守清氏同右近将監

と号元祖佐貫太郎資綱誕生母之中島三郎太夫

息富女と云宝亀十乙未ヨリ宝永四迄九百二拾

九年往古之城赤岩の北ニアル軍鑑ニテ佐貫氏

と載せあり本名互名トテ赤岩志かし文字を失

ひ未くみくハ赤井と云り赤岩氏傳系ニハ藤原
ミ未系ニテ大職冠五代ミ孫將軍小里麻呂ハ人
皇四拾九代光仁天皇の冠臣ナリ宝龜十乙未年
諸國追檢之勅使トシテ上野國佐貫庄ニ入御
ミ時中島三郎太夫息女室女トシテ美成資高郷と
シテ男子産小里麻呂歸洛ニ後戀死ヌ母方之祖
父養育シテ成長ニ後宦意の勇士ト成近辺志多
カシク同佐貫太郎資綱ト名乗其子次郎太郎嗣
綱ト名乗其子左衛門太郎俊綱ト云坂上俊仁公
東夷追討之時也嗣綱館ニ着御生依之嫡男太郎

江諱の玉ハリ其子を彈正良綱ト号スル人皇五
拾六代清和天皇之御宇佐貫の庄惣鎮守長良大
明神御在世ヨテ上野常陸上総三ヶ國の司小渡
ラセ玉ヘバ諱良の字給リテ其子忠太郎良遠の
字ヲ玉ハリ良澄ト名乗相續シテ四代良の字ヲ
用ヒ良澄の男子ヲ河内守光綱^綱ト名乗リ子鎮守
府將軍源賴光諱の字を給リ其嫡子ヲ治部正光
景佐貫太郎光綱太郎次郎綱輝五郎次郎綱氏帶
刀左衛門照綱八郎照賢次郎入道四郎太夫廣綱
此節壽永年中ニテ西國四國大合戦有之上野下

野之内教ヶ所ヲ給リ佐貫氏廣綱青柳ニ住城頼
 朝公軍鑑ニテ佐貫氏載ス文治四戊申迄青柳ノ
 城ヲ築住ス廣綱子三郎次郎照兼右衛門佐照興
 左衛門次郎照氏太郎五郎照勝小太郎照永安房
 守照道山城守照光迄七代青柳ニ住居ス享録元
 戊子年初午頃ハ本ノ下九の次第也文治申ノ年
 迄照兼代享録迄七代年數三百四拾四年赤岩并
 青柳ノ居住ハ上野國邑樂郡佐貫庄館林の城主
 代々相續の由未聞書の事
 上野國佐貫城何人乃築立年表志をス或聞書ノ

壽永年中佐貫四郎太夫廣綱邑樂の城ヲ築キ住
 ス誤ホらんウ我先祖乃聞書水戸中納言家臣宇
 津宮ニ跡三郎と申人の先祖代々の日記軍帳ノ
 邑樂乃城主赤井氏ニ多傳書有美永年の桓武天
 皇四代ニ孫平之國香常陸下総兩國ノ下総相馬
 の城ニ住ス其頃相馬小四郎將門迷心有之伯父
 國音を打テ安房上総攻取テ四ヶ國押領シ天慶
 二年將門大軍ヲ以テ京都ノ攻登リ此時源貞武
 藏相摸兩國を領ス武藏國豊島之城ニ籠城ス後
 誥として同國箕田城を築嫡子経基大軍ノ籠

城也將門防打取んと藤原秀郷方へ内通有り其
頃秀郷ハ上野下野兩國ヲ領知ス宇津宮の城住
ス將門打笛人多め次男田原四郎千春大勢差添
上野の邑樂佐貫の城に住ス後語として同國舞
木の庄赤井原に城ヲ築才田原藤次郎家郷大軍
を指添籠城ス其時秀郷後結として同國館野原
に軍勢の籠所ヲ構ひ家臣兼間左衛門ヲ番ニ差
置る館林尾引の城是也千春子孫代々佐貫赤井
の両城主とスる系圖ヲ以テ證として子孫不傳
る也△秀郷軍法として城之後語七城之事上野

邑樂城同國板倉城同國赤井城下野足利之城同
國梁田城同杓木之城同阿曾沼の城右七ヶ所平
將門大軍ヲ以テ押寄來る△秀郷從四位下武藏
守鎮守府將軍上野下野兩國ヲ領ス宇津宮に居
住城△千春田原太郎後相摸佐鎮守府將軍△千
春田原次郎後相摸佐鎮守府將軍△千春田原次
郎後上野佐邑樂郡佐貫城に居住ス△千園田原
三郎△千種田原四郎△千常田原左衛門尉從四
位下後鎮守府將軍諸野因幡之助永録十一辰十
一月ヨリ館林乃城主ニスリ元龜元年十二月落

城土橋善長寺子て切腹ス夫ヨリ長尾但馬守顯
永城主ト也文六家臣の分因幡之助一味之者ハ
首ヲ切或々欠落スルモ有合戦之分ハ別紙ニ在
夫ヨリ元龜元午十二月ヨリ天正十八寅年迄二
拾陸年長尾但馬守足利乃城ニ住居ス城代石原
近江之助差置小曾根玄蕃允加増被下其外文六
身方此家臣小ニ加増被下元龜元午十二月ヨリ
但馬守受取夫迄の町ニ佐貫町と申す外加法師
辺小有當地之引其節ニモ時分ニハ右左アらす公
儀ハ願上御代官として小林彦五郎御出町家割

立右町人ニ外五ヶ村百姓町人と也當郷村成島
村谷越村小桑原足次村臺宿を足次之古名ニ
合セテ五ヶ村蓮雀町並木町賢町佐貫町ニ有町
名也足利町と彦五郎足利出之人故住居之町ハ
夫ヨリ足利町と名付中候町人も多分足利ヨリ
引越候者も有之候館林と申町名を其節ヨリ名
付申候右支配として小寺主計青山刑部足利郡
新田郡梁田郡邑樂郡由良信濃守長尾但馬守兄
弟の領地ホリ此時但馬守家人大谷新左衛門算
法之上手ゆひ繪圖水ヨリ此役人として五郡之

内田畑開墾可仕旨兩城主ヨリ被仰付城ノ堰水
を廻し上手築沼を切て水を落し田畑開墾去り
天正甲子三月ヨリ同寅年迄三年之内館野原に
松植立此時迄館野原と申名ヲ改松植小出候人
足植初之日酒肴出て一ヶ所小三本ツ、植其所
ヲ山神と祈る夫ヨリ大谷ト申候天正十八年
成足利落城夫ヨリ浪人ト去り新左衛門名改て
休伯と成て足利の近所小住居ス小田原氏直と
夫ヨリ小条左京大夫城主と也天正十一未五月
ヨリ小田原領地城代小条左衛門佐八ヶ指置る

同四の顛新田足利西領小田原之城主と不和と
也合戦之分を別紙ニあり尤も取繕之上和談ニ
成館林之城領地ヲも小田原に渡り夫ヨリ西州
岡谷に所替ス其沢を別紙ニ有天正十二申二月
小田原ヨリういらふと申茶賣来り小寺丹後所
宿より取て茶賣始候其後丹後申様當所先親に
六斎の市立候所暫く中絶ニ新市亦近鄉村に
ニ引何卒市ヲ立度由申候といらふ賣聞て中
様然も氏直公に願上市立候様執成て右邑樂
郡佐貫町之市神之沢御尋之上飯林ヨリ飯島源

右衛門鈴木平兵衛召出さし水市の沢御尋之上御
漸管被下京都へ罷越再度市神ヲ鎮座立商人蓮
雀町之頃ハ飯島小被仰付諸商賣の落持問屋ハ
鈴木江被仰付夫ヨリ六斎の市相續有之然處ハ
町の場所悪敷候故に市立急候間元龜元年
館野原館林と云り今此蓮雀町暨町並木町ハ
右の佐貫町小有之町名ふり天正十八寅五月小
田原落城の以後関八所所の城、源家康公
江渡る其後當所榊原式部太輔領地成檢使役山
上五右衛門清水藤右衛門来る夫追知行高并諸

帳面も確と無之ハ故同十九年卯ヨリ己追関八
州出羽奥州都合拾ヶ國檢地御入村是之知行御
改無之ハ此内三ヶ年館林之城酒井左衛門御座
ふさ水上野下野兩國御支配ス天正十九年迄ハ
館林城普請もさの之丈夫ハ無之如榊原小平
太拜領後段之普請も出来尤町之圍城も其節出
来町年寄七人出来る青山大島鈴木荒井金子川
島檢新兩人町圍之城普請文録二己二月十一日
ヨリ村之人足出る堀ヲ土手ヲ築五六月ハ百
性作時故普請休同四年未乃十月迄小普請出来

古町人追之住居致候普請奉行柳原家人伊
藤數馬之助下奉行石川佐次右衛門荒瀬彦兵衛
早割惣奉行御代官小林彦五郎

長六百間余

長五百七十間

御城内

町内

横四百九十間

横三百間余

但町家分

家八百六軒

男女三千七百三十九

人

町數拾九町内

内 貳千七人男

千七百三十貳人

女

寺三拾三ヶ寺

馬 貳百八疋

臺宿町九拾八軒横町貳拾貳軒足利町五拾九軒

大工町谷越町五拾八軒風呂屋町片町貳拾九軒

普木町四拾貳軒塚場町百六軒肴町三拾六軒蓮

省町貳拾八軒豎町四拾貳軒水稅町貳拾四軒材

木町五拾六軒鞘町三拾貳軒鍛冶町貳拾五軒紺

屋町五拾九軒新紺屋町三拾六軒目車町五拾九

軒換断武人但一人ニ五人扶持被下外田屯町武
反武敵ツ、被下年寄六人内走人間屋五人扶持
被下五人被下物志し

一六百七拾七間江戸口御門南石垣ヨリ佐野口
御門石垣北西迄

一四百五拾間三尺鍛冶町御城端ヨリ目車町行
當リ迄

一四百九拾貳間並木町大手冠木御門ヨリ太田
口行當リ迄

一六百三拾一間加法師御門ヨリ金田遠江守下
屋敷武者通行當リ迄

一四百九拾六間五尺五寸達雀町通御堀端ヨリ
武者通行當リ迄

内武者走りの内三拾五町八間三尺五寸鍛冶
町行當リヨリ加法師御門迄押廻し如斯

一御莊四拾三門三門と御姫君様分三拾九門ハ
御屋鋪分御莊役年井吉左衛門一門ハ増

巳年ヨリ御姫君様御誕生ニテ三門一ツ増中
候四拾二門ニ^新敷悪敷故右之通りニ館林
領足利領毎年百性高懸り割合取立上納仕候

尤割元手代家送り状ニ有平井吉左衛門江戸御
敷受取申候御入用金九兩ニ歩銀拾兩
一館林御莊御入用金三兩貳步外ニ御目錄千足
被下御受負人小林久右衛門ニ口メ御入用金
拾參兩銀拾匁也

尾引の城由来之事

柳館林記の監觴を尋る一度ハ公城多る時記録
所ニ命シテ史官撰の一巻と云し宝藏小収武館
林記と号時成哉予察小求て是ヲ寫し深く秘す
久し然小予よこひあるむき此ハ近しカ聖記ヲし

あり家画の朽ふる本意未と以筆を述して志
を如を著シ在旧民家屋々攘り来りの草書一函小
彼ヲ是とし是ヲ非とせんや名将勇士の軍切を
隠し夫々の齋子零落して曩祖乃顯卷ヲ年さる
族もあらんあり公著も茂つて是とし直キ多
るあり民去を可ヒて上下の茂つて阿るひ小在矩
筆不聞愚毫智有人おかしあらんお但寛仁大度
の惠キヲ以正統ヲ記し玉ヒ都る世の變見ると
聞ヒハ違ひ多し況や皇霜以てテさぐあらん唯半
のハ実半ハ阿やまちあらんありと云こ

館林記卷之二

尾引の城由来之事

館柳老士世人誌刻世澆季小及てハ祖父の行跡
知る族ら有譬へ鸚鵡猩々乃能人の真似を在
る如し人として親の名所住所の旧事を弁さ
る人小して人未と云や忝亦くも館林城柳の
隆典を推見也と上州邑楽郡佐貫の庄赤岩の城
主ハ赤岩次郎太郎嗣綱と号し祖父大職冠五代
の廟齋將軍小里麻呂資高皇流四拾九世光仁帝
勅使として當國ニ下向郷士中島三郎太郎家隄

館小滞座宝篋十未年中島五娘富女ヲ愛シ給ひ
男子ヲ五ふ五ふ五小歸京期来して歸り給ふ富
女を別宅をかふし之程亦く出かま死を孤を祖
父養育して成長し隨ひ才知武勇人小越へ近里遠
村を隨ひ佐貫太郎資綱と号す其子赤岩小城ヲ
築赤岩次郎嗣綱咸甚ク盛大り其頃俊仁將軍東
夷征伐の時嗣綱館小入給ひ嫡子ニ一字ヲ賜り
俊綱と号し左衛門尉小補せらる皇統五拾六代
清和天皇の御宇長良公上野常陸上総三ヶ國の
司小備り給ふ俊綱ハ武勇ヲ感し一子ニ御一字

ヲ賜リテ良綱と号シ彈正ニ補セラる國司後世
ハ正一位長良大明神と尊号スシ奉ル良綱一子
左京亮良高其子有馬亮良澄良乃一字三代称良
良澄男鎮守府將軍ニ補任テ其子治部少補光景
其子佐貫太郎光継其子太郎四郎照綱一子八郎
太郎照方子スシ武藏長井氏ヨリ養子赤岩長井
一字宛々取テ赤井と号シ是ヲ次郎入道良照一
字^子四郎太夫廣壽永年中判官義經公ニ屬シ四國
西國の軍切ヲ顯シ頼朝公ヨリ數ヶ所の庄園を
賜リ文治四戊申春青柳ノ城を築引移リ家内繁

昌ス一族武威ヲ輝テ其子三郎太郎照兼一子右
衛門佐照與其子左衛門太郎照性^子一子太郎五郎
照勝子山城守照光^{但馬守勝光法蓮と有之何モ有矣}天文二十
二丑年迄三百四拾一年武威盛ナリト云セ戰國
ニ有ツテハ要害何シク大軍を引受籠ル成難
シト照光^武道の^武勲を以テ羽附大袋ト云ハ大沼ヲ
構ヒ一方口ニテ究竟乃要害也ト云城取シ暫ク
山城何ル正治元卯年舞木の領主俵五郎秀方ハ
甥子スミバ賀儀トシテ立越^ナ近藤苗木ト云所
以テ小兒集リ狐の子を捕テ打擲テ照光見給ヒ

て野狐ハ靈藹也放其盈しと宣ひハ鉢形惣五郎
来りて走り行鳥目ヲ与ひ買取て向の森放し
り斯而照光ハ其年七夕星祭リ南面ハ夜を更し
王不知ハ何國とも亦く位官正しく賓客庭上ハ
多、其みて我ハ當春一子ヲ助けらるる物也御
尊思ヲ報勢無と在然ハ今戰國と亦り國家安全
ホらず是ヨリ西北ニ劣リテ館林とて四神相應
し靈地要害之全在城地有百万騎寄来るヤ落城
ある有盈からず入させ給ひ某し縄張して奉
らんと云より早く数万の卒ん多く明松ヲ持来

て供奉を照光奇異の思ひまじ夢まろろしの心
地ハ館林ノ至る如小本丸ニノ丸惣曲輪惣門
惣見櫓武者溜り七重築地八重の堀町谷小路ノ
至る追軍例全く教チシひとり加法師の田中よて某
しハ稻荷新左衛門と申者也當城守護ヲ致と別を
奉る後世社ヲ建て、別にの稻荷大明神と崇め
奉る也照光觀喜浅みら尾引の城と号す不日
城を築美弘治ニ辰年辰成就トク城主安座本丸の
東八幡郭ハ菊間の長と云者住ありしハ代地ヲ
与ひて地ヲきよめ武家尊神ハ社を建稻荷曲輪

ハ別ニ築社檀ヲ建立シ善盡シ美盡シ武士の屋敷
出と小祠を建て稲荷を崇め奉り靈驗いち志る
しり中り余り有り後世迄も亦城小犬を禁る
る稲荷券屋を繁榮させ歴文多め也照光武威を
顯し天文十四乙巳四月七日赤岩山城守照光老
死を戒名ハ大覺院殿本誓法蓮大居士と号を但
遺言此骨ハ赤岩村堂山小葬石牌有御先祖ヨリ
赤岩文六照景迄四代の墓所有光恩寺託録ニ悉
く有之一子山城守左衛門尉照忠在京し足利將
軍義種公小仕しか父病死ニ依て御暇ヲ賜り帰

城國政ヲ執行其後病死息但馬守照安相續永録
九寅年重病ニて老臣大袋の城主諸野因幡之助
光規是ハ一族と云大老也次ニ小曾根領主筑前
の^子子玄番允政義其外旗本の面々ニ足利城主
白石豊前守久盛新田金山城主長尾但馬守長照
板倉之城主間下越前守小泉の城主富永對馬守
重朝北大島の城主片見因幡守師方飯野の領主
浅野甚内秀綱ヲ先として国士英雄共ヲ集め遺
訓して曰某し先祖ハ代々弓矢ヲ取て武威ヲ顯
し近城七將の旗頭小補せらば家門榮花を極る

る全く

將軍家の武恩也然るに今重病ニ伏し既ニ死近
し一子丈六幼少未だバ小田原小糸甲斐の信玄
種と斗畧ヲ廻シ隙をうかひ内乱起盛し兼約
の如く娘照姫を長照送り誓姻を斂力を合せ中
べし謙信公守立て外々如才有べからず因幡玄
番と心を合せ守多て拾五才ニ及ぶを上京させ
將軍家ニ拜謁武恩を報し奉るべし甲斐相州ヨ
リ押寄ハ旗下の面々七雄共小軍慮を逃らし堅
固小守リ候得とい、卒て死玉ひぬ可也是なり

乃るる乎亦利

館林記卷之三

諸野因幡之助遺心之事

斯而中蔭終て照姫を新田へ送り誓姻整へ内外
おさほり長久成し小旧家断絶の天災ニや數代
之忠臣と云一族として肩を並ぶる者も亦く威も
あくましく諸野因幡之助遺心遺心を起し心るハ我
今旗頭乃權威を振ひ國家掌の中ニあり然るニ
文六束年十六才未だバ上京させ家督継ハ我再
度家臣未らん所詮天の志ふるを志らさせハ返

て忍有と云々密小文六ヲ減減し一子内膳を家督
ニ世人多尺寸の許小有多年断金の江口三郎四
郎土橋右京亮加藤刑部赤坂玄九郎梶原市重郎
林圖書等之歩將共を招き種々饗應し大なる可
可し偏と各分力を頼入とを去ルは血氣と云人
の勇士共一言の思慮も不及我の左様兼小夜候
得共早く思召立候得共壽とめル諸野悦ひ何
れも深き志過分至極ト去小曾根と云六ツケ敷
男有能ト斗畧ヲ廻ら花屋し夫ニ付毎度年會察
せらる、ハ如何成明張行いる寄寄合ふて万こ

ゆふ人云くはもりしハ近來諸野ハ驕奢偏小目
立の底意有と察し心残付て伺ひルハ密小減
是少ハひサテあト思ひしハ亦実正ヲ前ハん多め富田
庄五郎と云小性羊束情ヲ懸て仕ひ志を知ル是
ハ密小咳トきハ汝元ヨリ一命を懸て我ハ仕る志ハ
満足セリハ様ハ次弟也何卒諸野ヲ偽りて実否
ヲ我ハ知セよ富田承り若年ニ某ハしハ大事を仰
付ら是候段身ハ余リ忝し忠臣ハ天乃加護有
と親ハ申聞セ候ト中ハ幸ハ也ト玄蕃悦ひ委細ハ意
趣ハ中ハ富田不届有ト閉門セ也

追辨れるおほそをさましは富田ハ浪々の身
とふり爰ありしこ小予ルリ諸野の方ハ所縁阿
也ハ色々お事起あ御慈悲を仰き奉ると
願ひゆる諸野兼て玄蕃の行政を尋文折節天
の子ハと收ひ召抱ゆる元ヨリ美童也しかハ
忽ち男色ふふやうて晝夜側去ス富田茂寢食
ヲ忘れて一筋ハ働まゆるハ益々心ハ叶ハ密
談悉聞寿満し玄蕃家從寄合三郎兵衛方江行
斯と告出らせゆる忠義之程と神妙也

小曾根玄蕃忠義の事

叔父玄蕃允政義ハ富田ハ密伏ヲ見テ此上ハ遠
く逃難くとして兼て一味の二階堂左衛門入ヶ谷
上野松木右衛門始澤与四郎等茂招き寄此度の
一美如何と評議ハ及び二階堂某ハ内々推察ハ
違テハ急き諸野一族ヲ討取ル事と申ル始澤
聞テ尤いさ起よくハ去今来りし若殿御母公
集集テハ千海益ふし一味の近臣等ハ御通ハ密
小御母公足利之方ハ落し叔父豊前守殿御預ケ
然然登し其跡ニ諸野退治心易候玄蕃を始何も
此儀小同し一味の近臣甲川田兵庫板倉権太郎

深野新五郎等小吼き辛也バ心得ハ仲夜具才ヲ
葛籠ニ入テ加法師ヨリ出て、兩人跡ヨリ駕
籠小策也奉リ足利口走り行斯と訴ル也豊前守
驚き母子ヲ旅亭ニ忍ハセ如才去ク取斗ハ也
諸野の悪逆言語同断押付討亡し文六を世ニ多
テ、人ヲ案乃うち也軍の用意甚急ナリしと云

諸野亭江夜討小根勇力之事

諸野を母子逐電のよしヲ聞密諫茂、も進テ大事
ニ仇を取逃し如何せん一旗同士の集め上を
下ひと返しみる舎平勤々由々人たす時ハ人

ヲ制しおくる時モ人ハ制せら類、予延引故怨
敵ヲ逃し北上本城ヲ取モ去ハ大災出来ん一刻
も早ク本城ハ駈入味方ニ歩將ハ禁門ヲ固めさ
せ籠城せしむるハ勝り得ん多う多あり
去し其内ニ小田原ハ内通し後誥あらバおそら
く関八州ハ危る、者有るから以面ニ如何と憚
去ク申ル多因幡ニ助聞ニ斗畧いと尤也然先
敵味方をかけ見シニ、今夜小曾根方ハ夜討を
及し然らバ志しの者也城を出テ、後誥せん其
跡ハ乘入門々固め妻子人質ハ取本丸ハ押込

ハ譬ハ一端小曾根ノ組ヲせテ妻子引連降来の
族有レ登リし面々来りて御計畧畏リ候然ル夜討ハ
馴ト多ク諸野右近ヲ討手の大將ニ中川次郎左衛
門初麻傳三郎加子四郎次郎今北三郎左衛門蟹
甚作千塚孫平次瀧川五郎作横溝隼人真壁鴉之
助今莊花平治是等ヲ頭トして雑兵五十四人雨
あト、ひハ風ト吞ヒよ相詞相印隠シ明松残り
未ク用意シしテ元龜元年九月十日夜更ハ小曾根
の鉢形の屋敷ニ押寄せル石ト小曾根方ニ
而モ兼テ用意シ多ク多ク役所ノ固めサ也軍配

して待懸トり其夜堀角弥八郎小林源八郎外曲
輪を見廻りルふ一散ハ欠来ル者ハやシや誰
と見せハ富田庄五郎也夜陰ト云何トて駈来ル
や富田夜討の次弟を語る堀角聞テ天晴忠臣此
方ハと打連テ駈入テ去蕃ニ何ハひルる政義聞テ富
田休足セよお敵方ハらハケ様クと夫レ小下知
ヲナシ門戸ヲ差テ人音ホク静リ返ツて招ビと
久夜討の者セ寄来リ目トめ見合小曾根程乃勇
士も運盡ぬモハ油断千万門も併モ打破セと元
少クと誥懸ルひク声ホて掛リル身ハ時分ハよ

しと聞の声ヲ揚待もふ幸の強弓共兩の如く小射
出た矢阿多矢もふ人射立れをハ寄手ハ案小相
違いて村をわつと引ぬる右近いあつてあふ
とつて不覚をとる備ひ固め責入と射をヲ揃ひ
て駿馬を去くり急い声を攻寄る玄蕃も時
分ハ能くと紺糸威のの大鎧二領重てきつくと
着を五枚甲乃緒ヲ志めて三尺五寸の太刀帯を
麻毛馬小打乗リ四尺五寸の野太刀真向小差か
さし一散小葉出せば宇城宇兵衛金岳五郎作高
坂半四郎武川弥内ヲ頭として究竟の勇士世左

右小隨り切り出る得物くの道具ニ聚散離
合の秘術主に鍊磨して戦功を顯らハせば寄手ハ
阿まきて近付玄蕃ハ勇兵ヲ七騎迄切伏し右
近ヲ目懸り入り間霜儀ハ森川忠兵衛左右
ヨリ引組り政義の出と打笑ひ屋さしき奴や
原出たんのと間霜ヲ踏倒森川をつらんで七
八人投りハ山岳九郎治森三七郎人磔し打
倒し一所死多りルり間霜起あらんとも
る所ヲ疊懸て踏れハ目口より血ヲ吐て是も
同く死スルク右近此を見るよりも一騎打ハ無

益ふり押込て詩取と散と小打立候所へ家長寄
居三郎兵衛堀工十郎左衛門上田五郎兵衛切先
古山三郎伊藤傳助深野新八同甚八富田庄五郎
切先揃へて打て出る二階堂七郎左衛門始沢与
四郎青山勘十郎同次郎兵衛鈴木雅樂男藤八郎
三郎其外五拾余騎城中より駈来り後ヨリ切立
れハ後浩有引取と云程と云可也我先小と跡お
め見をして逃みり玄蕃允ハ勝関を作り城笛
を休謝礼尽し當軍ヲ評す

館林記卷三四

諸野因幡之助本丸に集入事

斯る諸野ハ計策無小當り城中ハ小曾根方へ加
勢として出れ老ハ一族家僕引連本丸に集入家
中妻子ヲ人質ニ残らる取入徒黨トクの歩將小門々
を固めさせ心の儘小軍配にりる小曾根子加勢
の者せ立向り是ヲ見て妻子小心をせ忽ち武
心ヲ捨て降柔の族カラあしさせせ二階堂始沢入ケ
谷草ハ義の為妻子を捨小曾根ニ与越報人と計
りルリ去程ハ玄蕃ハ鉢形の屋敷ヲ出て、小曾
根搔揚ヒ立退き妻子良從守り其身ハ子力の面

とと足利ハ立越文六母子ハ對面し白石加勢を
を以り豊前守ハ先達ヨリ勢揃ハ軍用有し
ハ早速同心有小田原勢後詰せざる方ハ城ヲ
棄取人諸野一族足利勢ハ討せん哉城兵ハ元来
妻子小引きてのるは是ハ城中ヨリ裏切せんハ
必定ホリ早人立んと農祖猿太秀郷ヨリ傳來の
百足の太旗を押立三百余騎勇之進んて押寄り
諸野も兼て八方小忍ヲ入置しんて此由を聞よ
リ足利勢来らん小居ホラ受人ハ武畧の拙キ
小似多リ領地ハ敵を入居のらむと舍才勘解由

ヲ大五の大將として勇兵百五拾騎矢車の旗押
立高根之儘ハ出張して今やくと待懸多り白石
ハ豊島長門白石傳十郎加治田圖書平川田兵庫
飯島源六水沼^大八郎松田新四郎相馬勘四郎を先
としておし寄互ニ知りとるるを是ハ後日の評
を胸小杯命ヲ限り責戦ハ未之勝負も見ひざる
を以諸野右近横鐘ヲ駈来り散々ハ切立見ハ足
利勢利を失ひ引色ハ見ハ少取ハ小曾根一統
二階堂始沢某師事入々谷某諸野ハ後ち切掛ハ
ハ何ハ以て多まるへき我ホとらしと乱れ多

つ館林迄引入とり白石長追ハ無益なり勝手兜
乃緒ヲ志めよと高根臺ハ陣ヲとり討取首五拾
三東口ハ搦並べ武威を顯しゆる時ハ秋山出雲
之助申様軍機ハ追々志ありと張子房ハ秘をる
所ハ此ハ以テ臆病神の覺ぬち夜中責寄夜明
より致玉ひ白石尤と備ひテ繰り出し城ヲ追取
巻戻の声ヲと揚りしる城中ハても同く関を合
世江口四郎次郎小倉花平治綿貫五郎左衛門赤
堀傳右衛門柳川兵部成瀬清右衛門森園彦四郎
小寺佐吉中井五右衛門大島藤八郎を先として

武勇小名ヲ得シ英雄ヲ援つて切て出で火花
をちらして戦ひしる三拾四度の欠引ハ柳川成
島森園始め二十八騎討るをハ白石鞞原小坂四
郎三郎梁田家六和泉八郎右衛門猿田軍平大畑
五郎四郎大岩孫次郎宗徒之勇士拾四人討死す
白石ハ木戸村に引退陣を取手負多々寄重而寄
人ニも勢勞見より近隣ニ諸將ハ牒し合重て本
意を達せ人と皆々滞陣有しとる

長尾但馬守館林発向之事

新田金上城主長尾但馬守長照ハ越後鎌信正杉之一

そくして武道不達しは八関東押ひとして在
城より文六姉婿よりハ是悲諸野を討て仇を報也
人と軍慮ヲ廻らしはる先達而白石押寄合戦小
及ふと云せ勝負未く滞陣のよし驛驛意要害堅固
成小目方の小執を以て攻んる以ての外のも也
近隣の諸野之諸將より合せ双方ヨリ攻寄ハ
勝利全く心せりと磯田壹政守島田勘解由七衛
門ヲ以て一々觸らせし各同心一列し永録十
卯年十月廿五日双方兼向を登き小定サヤり先長照
ハ鎮守之八幡の宝前にて旗ヲ上ヶ續兵同苗尤

衛門佐水堀兵庫山上新右衛門公家五郎兵衛谷
津内繕新兵織部山越軍平正木五郎源名伊織熊
谷亮平治寺泊内通今井新脊中曾根九郎四郎小
紫八弥八田源七衛門ヲ先として都合其勢式百
余騎木瓜輪違九星ニッ引龍小三ッ巴片波立浪
福之紋付多る旗共二十余流西風小靡カ也押寄
る小泉の領主富岳六郎四郎嫡子新三郎二男兵
太史築地若狭守同兵内渡野彈正同彈左衛門様
井丹後守同五郎三郎新兵丹波守同孫市細谷右
馬之允同子一郎杉山圖書同長四郎宮杉原左衛

門新福守五郎五郎茂木若狹守堀越藤兵衛久保田五
郎左衛門近藤又三郎同采女川上甚三郎川島久
四郎永見弥一郎飯田右近武士孫兵衛其外田辺
萩野笠間中川菅野市川具塚合て百余騎二引龍
二三ツ柏扇矢車團扇十余統吹靡し美刈一成長
尾式部謝禮巧巧小曾根玄番允入ヶ谷上野久又
十郎二階堂左衛門尉ハ赤旗小九輝丹旗真先ハ
まゝ如バせ先ツ諸野ハ大袋の城代吉沢高書の楯
籠り多ルヲ一散ニ攻破り吉澤ヲ始め悉く討取
とる士首二十四切懸ヶ軍神を祭り勝鬨ヲ作り

立伴木口より押寄白石豊前守大畑治部少補百
手連銭の旗を押立足利口より攻入片見因幡守
浅羽左衛門尉茶師寺始沢大同列ハ左の巴扇車
竹虎手長の旗を進め佐野口より責入追手搦手
関之聲鐘太靴鉦具の音天地ハ轟々山川ハ轟々
あり近里遠村を肝を毛やし城中ハ待トふ次第
る更ふれハ尋常を二関を三攻四也五直六ハ射違ふ矢軍
の時を尽し白眼合ふニて扣トりトる処ハ寄手
之方二引龍之差物ニて紐系威シ此鎧ハ大太刀
を帶芦毛の馬ハ打棄去つくと河中之寄請和天

室の後胤足利と一某御厨十郎未孫小曾根玄蕃
允政義也いふ小城兵互小知もる武勇の友尋常
小勝負せん早く出よと呼已つあり是ヲ聞より
緋威之鎧細毛の馬小打栗大太刀援かぎし一
散小の帯出さハ諸野あ一族海老瀬権平次秀兼
と名乗て打手懸り五小秋術を尽して戦しか政
義大音上ヶ壘懸く打込太刀秀兼寺の内迫りル
人受返さると見ひし所小鏝元ヨリぶつきと折差
添接んとさる所へ政義をあさむ打込太刀肩先
切せと逃返んとり諸野つくづく是を見て強弓

ヲ以て射留よと雨の降る如く射出しルる政義
笑ておも白くと右小太太刀左小太刀接以て切
筋迄切落せハ人間業とハ見ひさりルり富岳入
ヶ谷玄蕃ヲ討まふとどつとおめいて押懸りル
り城兵廿百余騎欠出し火花ヲ散して戦ルる測
名四郎三郎濱野弾四郎勘新次郎入ヶ谷藤三郎
築地隼人を先として二十四騎討死を城兵も根
尾勘兵衛相崎権右衛門伊藤八弥森下源左衛門
藤子木出羽津嶋茂兵衛ヲ始三拾二騎討を相引
小まる所小諸野右近ハ頼と切よる良築柳沢新

左衛門ヲ討取らば無念骨髄ハ通りて劣るの敵
を討人と無二無三欠出る中野の領主室田和泉
守急度見て珍敷秀行社室田勝成也日頃の廣言
互の武勇を顯さんと劍を削り鏢を割火の出る
斗り戦へしあ互よおとらぬ勇士ハて更に勝負
ハふありゆる互よ勇士のふふをハい川道戦ひ
盡さんヨリ組て勝負せん秀行心得とりと無手
と組て馬の間ハ落少るあ上よふり下よふり互
よ勇力争ひしハ勝成組勝て秀行の首を取て立
上らんとする所は因幡之助の一子内膳眼前ニ

伯父の敵のふきしと駈来り勝成の首を討人と
する所ハ玄蕃の一子内膳之助崎沢藤八駈来り
内膳ヲ生捕勝成引立寄手ノ陳ひ引取しハ天神
地祇之應護かと皆一同ハ悦びあむらをもく起
楯を打勝突ヲ揚よ辛る因幡ハ是を見るよりハ
我等此謀反を企しハ内膳ヲ世ハ立ん為そのし
彼生捕をも浮世ハ何の望みあらん我身も今ハ
是道と櫓より飛て下り欠出まハ大将ヲ討たふ
と河口三郎四郎宇津木三郎兵衛大橋兵次郎菊
川惣兵衛赤槍吾兵衛赤坂傳右衛門小玉主人板倉

弥平次千塚三郎右衛門ヲ始末よくと切て出
ハ測名ニ階堂富田長尾一黨小曾根入ヶ谷因幡
も討取せと手負死人を返り見せ主従親子も助
幸多しと乱軍絶残付ツケの村をツケの勝負ハ更不知
さりり所へ大畑治部少補ハ大手の軍甚
急ふりと聞よりも搦手ハ白石イゆき手勢
引具し驍来り横鐘イ突懸る城兵叶ハぞ引入
り寄手ハ猶勇氣進んで附入葺責イ困幡ハ
矢丈小思ひた乱軍小引立ら其上海老瀬権平
次深手ヲ負大手乃片原子倒是掛居よりしを引

寄鞍脇引付大鞍門迄連来りし小敵ハ罷入味カ
敗北ヲ見るより海老瀬ヲ引攫んで門内小投入
是大太刀真向小差イさし當るを幸ひ切拂ハ
手負死人ハ教知在城兵モ此門破らせてハ生イ
いふしと久保下野合羽佐助磯崎権兵衛源野甚
四郎田部井甚六大辻勘左衛門ヲ始五十三人枕
を並イて討死其内ニ因幡ハ引取大鞍門ヲ固
メたる寄手ハ熊坂出雲守寺沢平治後藤七郎治
酒卷勘七中島彦七茂手木五郎兵衛新井半四郎
ヲ頭として三十余騎討死以早日も既小暮カ、

り帝をバ寄手も陣をとりて固め帝利卷の四か
り

館林記卷の五

諸野因幡之助一族滅亡の事

去程小諸野ハ悴内膳ヲ生捕き十方を矢ひ寐食
ヲ忘れ更ハ人心地未く城兵を落し此上ハ早く
扱ヲ入和睦をせんと善長寺江密山頼ハ遣し
る室大曰く我輩一人小ハ大義計リかよし普
濟寺茂林寺遍照寺又赤岩之先恩寺ヲ始め五ヶ
寺同道ニテ長尾の陣ハ至リ國家万民之為め因

幡旧悪御免所領を内膳ニ被下置候得ハ剃髮し
て墨染の身とふし入寺仕らんと余義未く被申
帝も七屋始諸將各々申如く國家安全の為と云
文六かせといく是ハ尽ある義未しと尚掌し釈
氏も路去ひ然者明日善長寺江死出登き由諸將
方々も内膳召連御會益一献壽々如度よし有
り各々同心有僧徒脱ひ城に入り因幡ハ
ハのり申談り明日笑ひハ志らば内膳中るを
んと娘しき小翌日ハ大沼ヲ船ニ乗善長寺へ
出る昨日迄ハ大将も今日ハ剃髮染衣子巾への

屋外小まやう親心とハ云ふから三代の惣恩主
君を亡し家督ヲうむひ我子と人とな非常慾心
忽ち其身小むむふを浅ましき死して諸將も内
膳ヲ召し連れ直小對面寺院執合せ吳越も心ヲ
合ちハ隈を屋としてまやといやんや同家同土向後
水魚の交りをおふし國家安全を顯候と獻盃を出
させしの大惡無道の因幡を見るより各々心宜
からず不興起小見ひりる可某寺九左衛門公
通玄番ニ叫きりる天乃とふる大敵今討むん
と後の仇を人ぞ施さんさめくと云々をバ元よ

り待小事ある玄番心得とりと因幡の前小差
寄ていり小光親旧主の大罪頭利をめきを以尋
常小生害せよと誥懸る因幡もさる可の勇士い
り小内膳汝しを國家の主小せんと思ふ余り小
如斯天命不也ハ誰をらみん様もふしいききよ
く腹切せと云より早く腹かき切内膳供小生害
せをバ玄蕃ハ一々首ヲ討落し旧主ニ牌前小備
ひりる良臣せも指ちりひく一人も残らぬ死多
りキリ死鬻ハ寺内小乱ヲ未以天罪の程社志也
是夫ヨリ長尾始め諸將城小押入一族并反逆の

の張本江口土橋加藤赤坂梶原等悉く切腹せし也
妻子残^り追拂^り歩^みをどしよと逃^れ出^る有^る様目も尚
りせぬ風情也又忠儀ヲ守^る勇士も妻子も逢^て
万歳を唱^ふ不善惡邪正月前の鏡^後へ志^る願^きる
也去程小諸將ハ一礼お^りて面^を歸^城せ長尾
ハ在^城し金山より妻室を向^い証^す舎^弟由良信
濃守ハ玉ハリ文六を呼^びひ長照を顯長と改
め玄蕃ヲハ^繁前守ハ受領させ諸野^の願^所証^を
加増し専ら國家之政務を預^らせ其外諸^郡に
是^れ文六歸城^をさせ玄蕃ヲ始^め申^意なく障^を

伺^ふ顯長權威強むふしく時節を待^盡しぬるそ
く^あり^て希^也

小田原勢彙向之事

叔^も其後小田原北条左京大夫氏政ハ關八州ハ
威^ヲ揚^るひ武田信玄上杉謙信佐竹義宣里見義
弘四方の大敵國ヲ單^に龍虎のい^き不^ひを^たし
合^戦上^るふし然^し小館林赤井但馬守照安病死家
臣諸野因幡之助謀反ヲ企^て則^ち主^を追^出し國家
押領^ニ由^使ヲ以^て以^來其家^ニ屬^し忠勤ヲ希^也
む者此度御扱給^はしと申^入其後小田原ニ而^ハ

何卒利川ヲ越テ館林ヲ去る可レ也ハ西上而迄
手入んと降を伺ふ折節去建ハ一儀レ不可不及領
掌柄り然レ諸野運やつき滅亡志レ可レ也一レ度頼レ是
し一言捨置ゆきレ不非元龜二末年九月討手と
して北条家臣伊勢備中守山南上野之助定方同
紀伊守堀賀伯老守綱吉を大將として其勢二万
余騎館林に押寄る長尾此事を聞より旗下其外
之將軍家臣等集り軍の評定區也富田又十郎申
様尚時北条家武威甚盛レして斗畧を廻らし攻
寄る処落ると云ふレあ上杉ヲ亡レしある後悉

く責隨ふ也然レ近隣の小せり合と違レひ隨分軍
慮廻らし種々計畧を以て勝利ヲ得レ半先大手
を御領之森長井に渡し又搦手を古河杉之渡し
を以て圍むレ各々如何と云レは是ハ浅羽左
衛門佐仰也尤レ此逆中之事小泉飯野大島早
川田其外口々ヲ固めらば種々御方便社レ可レ未
不レしレ是と申長尾ヲ始め何建レ此義レ然と軍
有レ先小泉之富岳父子二階堂始澤等館林之測
名兄才富田小大島之片見浅羽早川田ハ大畑某
師才兄弟三人杉之渡しハ入ヶ谷龍木足利口と

田石一統館林ハ長尾一統高櫓二十四ヶ所門々ヲ
固め矢種三五年不足し兵糧も十分也千万騎
寄来るせざるふしと廣言吐て招ルる重て軍評定
有ニハ伏兵横鐘然るべしと青柳古城小菅根
築前守近藤林小赤岩小六堀二小小寺圖書大袋
小ハ青山丹後同四郎次郎鉢形圖の出崎と相場
与三郎鷄村小大島修理大佐貫ニ加て見大輔三
林小豊島島五郎其外一々配不及斗策残る所亦く
用心嚴發待懸り形而小田原の先陣長井を渡り
押考り小泉之旗下仙石之領主岡山播磨守菊水

の旗押立待懸り寄手押寄関の声揚る小城中
曾而音亦し扱ハむ支しく旗斗立落るるヤ多
くと門小付て打破らんとはる知小岡山新左衛
門狭間押関武人張ニ十式束差誥射多りし小
真矢小進し飯田又十郎の胸板を射貫裏ウラヲ返り
是を軍の始めとして強弓の多るは矢種を如
しまし射多りし小近くと押寄せ多るあるは是
ハ的ありて色あまこり播戸守時分ハましと
勇士を引連切て出る千變万化勇之を向るふ初
め阿茶とつて案ノ違し一端ノ攻む處からし

形て勇士ハ助ケ置策を以て軍を引取評定可川
て堀賀伯耆守小泉之押として惣勢館林に押寄
る旗奉行成田儀八郎三鱗之大赤旗眞失小龜甲
輪違三本印梅柏雪折竹雲小新竹小虎家との旗
印可多ふふいといと^子志し五拾四流吹靡し行軍
進んて押寄より殺父熊谷の一葺ハ飯塚に備ひ
金山の由良を押し忍川越のあ家ハ仙石之岡山
播广守を押しんと吉田に備ひより麻子丹後守
吉見隼人正并勘置田勘ヶ由ハ小泉之横鎧小石
打村に備ひりる伊勢備中淡谷鎌倉江戸騎西之

軍兵を率し茲森八重笠ヨリ押寄る城兵歎不足
ヲ留させしと築地若狭濱野陣正茂百木右衛門
武士半四郎近藤又三郎新井丹後飯野圖書梅井
丹波守新福寺五郎堀越源七郎細谷与一郎杉山
卯十郎川上五郎七飯田権八郎隈田清助増田伊
織中島久三郎中田与八郎并江勘左衛門先とし
て進む其勢三百余騎一枚楯を足軽十もあせ討
手揃ひて馬上ヲ備ひ関をこつと可幸る寄るも
同く関を合せ五小矢を射違ひりる其内小黄
の旗一流大将浅間四郎兵衛尉百余騎魚鱗小の

ハリ濱野潭正細谷与一郎鶴翼ニ開く火花ヲち
らして戦ひし城兵旧玉源十郎成川五郎作ヲ
初として三拾余騎討死を其中ハ濱野ハ浅間ハ
即左衛門を討取細谷与一郎下田縫殿の首ヲと
る所の所ハ城兵方より河原毛馬ハ黒系の鎧く
是赤ハの母衣を掛大長刀を馬の平首ハ取添志
つくと棄出し新井丹後守と名棄勇る者を幸ひ
小次郎瀧ヲ寄る方より今川左雲と名棄馳合
せ戦へし新井ハ長刀ハ掛らるるあり是を見て
寄手之中より黄河原毛の馬ハ紺系此鎧を着し

山の如く成大男欠出麻目右近と呼ハリ無二無
三小切立る城方よりハ磯島花平治天晴の敵よ
と欠寄て了と打麻目馬ヲ棄違^娘返り大長刀ハ
て拂落る濱野清十郎矢島次郎右衛門左右ヨリ
無手と組麻目騷るる脇ハハ込うんと云てメ
ル也ハ血ヲ吐死ハリ是を見て城兵肝を消て
然如ニ緋威の鎧ハ麻毛馬ハ打棄團扇の差物丸
尺斗りの大身の鎧ヲ引提て一さんハ駈付桜井
丹波守とハ身あり也麻目殿の御子之内目を警
るしより一勝負仕互ハ勇士顯し敵味方の目を

覺き人と葉付ふる呼已のあり麻目笑て承り
及し様井殿願ふ如のと四尺余りの大太刀ヲ引
拔て大身小合せ鏢を削り鏢を割火花をちらし
雷光の如く呼響声雷の如し敵味方も阿さき
果て阿さきよくと見物を互互又勝負ありし様
井ハ阿らまると去得道具也麻目大長刀最前の
組打小投捨四ヶ度のつゝ武者終小様井小突
当ら類く寄手ハいゝ川て鉄炮を一面小まぐめ
打立ルる小城兵方ハ未多鉄炮少ふく打返を
登起様もふく是非ふく志と口く引取ルる寄手

も引揚て陣所を固めける

館林記卷之六

館林合戦并稻荷大明神冥驗之夏

附、館林佐野合戦并長尾彦間の城大集取
夏

而大手乃寄ま谷越口より押寄搦手ハ古河へ
渡飯野大島村小目も懸を板倉ヨリ土橋へ出
押考考一同小関を揚山川沼地小毛らき遠里近村
賤山山も肝を消し城中も鉦太鼓をまらし関
を合せルり寄手より城中を見進ハ家々の旗四

五拾流にるるひり鎧武者透りて人待懸とり終
る取しやまらの矢間を開き柳是を武茂國豊島
に冠者五代孫三河守義種の子新五郎義次也
小糸家の軍將足利鍛冶のきよひしを免りて見
むひとよつ引むやうと放り矢式丁部らききし
里て美作四郎次郎のせ人多んの板に射込めハ
あちまう流て死ありルり是を軍の始としそ互
し矢軍時を移し取し小田原の先鋒朝倉右衛門
佐由井三河守日向五郎兵衛尉勇兵ヲ率して切
て出る城中よりし細谷右馬之助ヲ始り近藤又

し也此上如何成計畧を廻りさん近國よるひの
兵もふし免南神力を仰かんてハと城主長尾ヲ
始め諸將せし鎮守両社来て國家安全之感力を
あま給ひと丹誠無しの祈念をふしゆる不しき
や其夜雲のた曇り雷鳴四方に幾千万世なく明
松出て数万の軍勢敵陣に押入さふら寄手ハ
長途の疲き後誥後巻有してし凡志をとりると
思ひしし事し違ひし大軍戦し利なく引せあし
退ともなく覺ひてして引返しゆる真子に人力
の及ふ所は是非是偏し両社の守り就中稻荷灵

檢いちあるしと館林の士農工商出家社門女童
小至追籠之鳥之山林放させ可之魚の水中小の
可也ある心地し信心いやましめる尤也小
田原執為陣前代未聞之也此実否を多、をむん
ハ有べあらはと軍將志きり小願ふ終小癸向を
ヤき如小戦國先差ある大敵と北条家ゆいとま
未く館林のときき小城ハ捨置多せハとて又時
節社有べれと年月を送りル子社軍將胸ヲい
あめ時節ヲ待盡し暮るりて天正十二申年こ未
つて小田原志川あ小成しが館林を又責べしと

此度ハ氏直出馬有らん連以前軍將小召連伊豆
相摸武藏の軍勢ヲ率し行田追出張館林之容体
評議有長尾ハ例之藤本國中の英雄を集め利根
川又ハ早川田舟場くを固め用心厳しく猶又両
社小奉幣有て信心他小ことふりし小其頃安房
之里見小糸と國を可らるひしあ弘小乘りて鎌
倉ハ押入ハ八幡宮を始め神社佛閣ヲ燒亡せり
予小田原ハ聞ハ早速小糸出馬追拂んと用意甚
ハ急也氏直も軍を引取直小鎌倉ハ打出屋しと
の急飛到来取物ゆ取り可ひを帰陳有しとを思

寄曰是變にて館林安穩と是偏に神の恵みあら
んと難有る世あり

館林佐野と合戦之史

其頃野呂佐野之城主修理太夫家綱血氣矩慮之
驕將にて先祖鎮守府將軍秀郷廟齋足利又太郎
忠綱より十六代抑農祖秀仁茲宮城より傳來之
宝物子孫家々傳り就中佐野家より飛來矢と云
鎧又海中土現之良等小男子孫茲太郎と云他人
子子鱗の形有万丈不劣の太刀又忠綱宇治川の
先陣之時川底の綱ヲ切り名譽ヲ顯し多る綱切

と云名鎧も傳はり年来館林と據り論し國を可
らそひ止む或時ハ佐野利運し又或時ハ館林利
運し所謂る村里ハ稲岡西場駒場東寺岡上羽田
是佐野領ありしを長尾責取也と戦度々不及不
八杓猿田合戦ハ長尾敗北是利古城之引取宗
綱足利ハ押寄ハ八幡郭進押込し小新田館林よ
り新手駈付宗綱敗小を長尾新田惣軍ヲ率し佐
野ハ押寄るよし村上山の天谷佐渡椿田福地出
羽相馬ヲ以テ宗綱ハ許小宗綱聞て我領領内ハ
敵小足を入させ人ハ武勇の拙者亦是ハ急き驥

南^向て蹴ちらしませんと出馬有ハ富士源左衛
門井沢山城守細井治左衛門稻垣淡路守葛生縫
殿之助山越才吉弓鉄炮を操出し駈向ふ後陣を
山上道及大棧越中守赤見六郎戸室才亮青山権
八郎早川田左京等續き来り然るハ長尾ハ佐野
ハ籠^籠下面鳥の城を責^責殺^殺り佐野城代高瀬紀伊守
討死城ハ長尾兼取宗綱を祢人晴やら以命を捨
て取返さべしとてむり攻^攻責^責ハ希^希る館林の旗
下七騎^後馬^誥として駈来りル^ル宗綱之後ち備^備ヲ
切拂ひハ力ハ及ハ^及以敗軍して佐野ハ引取ル^ル

其後佐野ハ富士山上大棧井沢等を始め面鳥
ヲ取返さんと軍評定度^度也し^し宗綱近來武勇
不^不こりて匹夫此勇を好^好目立^目存^存拙言慢^慢可^可譜
代家臣の諫ヲ聞^聞以^以不^不切者也若輩ハ血氣の勇を
賞美^賞可^可る老臣ハ先切む^切去^去しとて有^有可^可去^去可^可の
様各々心ハ差^差去^去む^む可^可去^去を智謀^智中^中志^志去^去く^く刺
ハ山上道及ハ武者修行とて遂^遂電家臣心ハ成
て突^突ハ^ハ遠^遠から^ら以^以と見^見ひ^ひこ^こる長尾ハ浅間新左
衛門尉同甚内面鳥の城代ハ入置ル^ル
長尾但馬守彦間の城棄取事

おも彦間城ハ佐野持ニる城小野兵部父子ヲ附
置彦間ハ佐野より程近く館林ヨリハ遠シ多勢
ヲ以テ攻る時佐野後誥せんハ館林勢利所ら
於所詮智謀ヲ以テ取んニハ小曾根筑前守を批
テお彦間ニ城棄んと思ひせカ攻ふ事ハ佐野
後造六ツケ敷貴殿計畧ハ過盈から以て成就せ
る彦間城を其元ハ取るべし聞ハ城代として小
野兵部良臣田沼下野守を其方の縁者多るよし
何卒其よし謀兵部父子討取べしと有れをハ筑
前取リ謀畧の程如何所らんや先計らへ見ハ中

と夫ヨリ自身と彦間ハ行テ下総ハ謀殺ヲ進め
是非館林ニ属し彦間の城主ヲ成給と言葉ヲ通
し進めしかバ欲小々遂人人心同心を筑前共ハ
謀計ヲおしひ忍ひくハ小曾根ヨリ人数ヲ入様
子伺セ待居ヨリ去程ハ歳末ニ至リしかハ年始
ハ小野父子下総の宅へ相請るハ何心ホク入
来種々響應風呂ヲ所らトハ立テ馳走の為進め
ルルハ小野父子運の尽ルルハ何の思意もホ
ク風呂ハ入りルルを筑前兼テ伏兵ヲ殺し湯室
ハ飛入父子一同ハ殺害を所まつさハ下総ヲも

討取妻子一族悉く追出し忍入し人数ヲ吹て門
々を固め押へて城主と成ぬり去程不落人佐
野不來り設こ趣きヲ速に去ハ宗綱座ヲ打て所
ら口惜や面鳥を取巻しさひ無念晴やら彦間
追討取きて佐野滅亡也此耻辱をくおむん
ハ生て何のめん目あらんと家臣共不評定有共各
くゆむり合て軍慮を速る者ハ去し宗綱心懸ヲ
いふめ譬ひ如何程の強敵たり不意を打て勝
利ヲ得ると出る去し来る正月元日館林へ出仕
去べし良臣共視儀出、ろを寄軍備以怠らん

必定せり其虚を討て取返さんと密に用意下知
せらる大接越中守元日の出陣凶事也必せり諫
めずんハ臣此みち多、つ三度不及ひ許用去く
ハ勇退んと思ひ定め出仕して宗綱下諫めらる
ハ元日の御出陣陣の事再三仰せ出させ臣等君之御
威光に忍を各と口ヲ閉候某儀不才去りと云と
ハ大老職に居て諫め奉らざるハ臣の道立ハ再
三申上候通以り不意に打ゆと元日出馬和
漢其例ありし先元日と御身を清めらる誠意身齊
家地國平天下の政事ヲ以て天神地祇を指礼臣

士歩卒ヲ始め農高切工神官沙門等至る迄夫
の勒行中ハ邪氣を拂ひ也然る所ハ血を流し
人の命ヲ絶候事ハ一神國の授ヲ背き不淨之心
ハ相成多是非と思召し止まり玉以後ハ謀畧を
以彦間城御手入候様臣等討ヲ廻らしハ申可詞
を盡し中より宗綱以外立服有是程追用意多
る出陣汝ハ出る時ハ先ニ我武勇衰ハ多りと内
外ヨリ笑色ハ所詮同心なき者ハ必ク無用我ハ
志ハ有者斗出陣まべしと云捨て、立り大捷
を洞ヲ流し弟家既ハ運尽あり我是迄と居城閉

籠り古しハより巨カ疎ヲ聞入をして榮久成
大将唐も日本もあめしまし後將能并ひあまひ
少人の滅亡と替り大人の滅亡の数万の敵
是ヨリ大ハ成ハあしとあや

館林記卷七

宗綱出陣滅亡之事

おも修理大夫宗綱ハ臣之謀ヲ聞て自分高慢
のりて天保十四年極月三十日の夜軍勢を集め
其夜丑の刻出馬生不思議成哉白装束之女馬前
ハ立腹ヲ流し居りルリ宗綱いかつて人ヲ以

て拂ふ不更らば實の体も亦く消るハ顯已過く
近士軍卒各ニ肝ヲ乞やしむる不を斬りたり小
曾根急て忍びテ入て聞濟し妻子ヲハ山林に隠
し歩卒を集し不数葉郡名草の住人芳賀右衛門
佐ハ半月の差物押立歩立ヲ召連着至以二番子
柳田村ニ住人柳田隼人山下播戸守泉新十郎岩
下右近杉本修理駈来る小曾根ハ驚歎救葉郡坂
の森の中不静ぬり返ひて伏兵以宗綱運之尽し
や多幸秘苑ニ逸物関東一の駿馬石小爪突鷲と
いふや忽ち鼻嵐を吹出する軍兵歩卒も續ちてこ

此富田源太山越才告可先備ヲ押破て走り行宗
綱無双之馬の達者種ニ押せば止ぬらば救葉
郡坂之上追築欠たり小曾根是ヲ見るより是こ
也佐野の先かけよ天晴よ紀勇士也一騎ハ御無
用組合打し只突取進と云はれハ畏まわさとい
ふやいふ礮と打帝進ハ何可也以て多なる盈き真
逆様不落多りルり豊島七右衛門首ヲ取んと近
寄ルをハ彼武者起上り天晴汝しハ冥加也去せ
汝可太刀ヲ以て我首ハ慮外也此釵ヲ以て討べ
しと金作り太刀を差出さ豊島受取ル進ハ彼武

者自甲の綴を疊揚首ヲ延トり豊島一乃ヲ打落
去委ハ大勢欠寄人馬セハ森之蔭ニ引入テ小曾
根ニ実檢ヲ色ハ宗綱也不思議ニ仕合哉ハ勝
鬪を揚よト貝鏡太鞍打テ取リ形ヲ取ヘ佐野
の先勢富士源左衛門山越才吉郎松村奇藤服部
大川我ハくと駈来リ大将給ハハ生テ詮スし連
の狂ハひニ如ク面ハふラ以切返スり待モふテ
ある小曾根ハ勇兵大将討取其勢ハ雷光ノ奔ル
る如ク恰モ飛龍ノ天ヲふけ猛虎ノ風ヲ得
て地ヲ踏ルるハ小ことナらニ佐野勢ハ亦ニ力ヲ失ク

進ニ兼シ如ク柁崎ニ新井圖書大沼田淡路市川
右衛門尉久保伊賀駈来横鐘ヲ入シあを佐ノ勢
忽チ礼セて右姓左姓小逃行ハり去程ニ佐野唐
沢ノ城ニ大援越中守定行ハ沢山城守清秀飯
塚兵部少補綱高瀬紀伊守綱清赤見形部少補
秀顯小見小四郎忠別其外ニ歩輕勇士集會シて
主君ノ災害歎キて甲斐子ハ息女ヲ可ク養子ヲ
妻合家を継グるハ小糸家ニ志スハハ急ニ中
入嗣ヲ賞ハんと大援小田原ニ至リ氏政ニ弟ト
衛門佐氏忠ヲ名跡ト定メ佐野ノ城代ハ大援ヲ執行

ふべきよし約談あり氏谷も追る入部有べきと
のりて家督相續しありけり寔に又宗綱父子
天徳寺と云沙門祇氏も入しあり曾而佛法ヲ不
学武道ヲ好むと刀鎗之妙術ヲ得て武者修行ホ
出しか秀吉公も仕ひ師範ヲありむり滝勤阿る
如小老母より使来り宗綱討死ニよつて家督有
べき所も大授ヲ初め家老共小条家の威におそ
き氏政の弟ヲ貫ひとるよし心外千秀生あり支
し此節其方計畧ヲ以て入国し我ヲも養育せし
しとの書面驚入勤仕心はらざる所も佐野家隨

一の家臣山上道及ハ廻國ハ出心の儘ニ執行ハ
せし小宗綱亡後の事ヲ聞急き天徳寺に尋行此
節御帰國然るべし某御供仕んと思ひ込んて中
より天徳寺に候立則秀吉公も伺ひし道及武
切聞及び對面せんと呼出させ種々懇命之上ハ
天徳寺の國より暫く待べし家老共一果小条小
房其るとのりあるハ不斗あるしと成死志か
さかる處し近し関平に我も旗を出さげし其節
佐野亦とも天徳寺へ授くべしある人を関平切
者の者亦きハ関より東箱根山中ヨリ山田平城

繪圖ヲ認め給ふとの仰ふ也与人畏りしと委
鋪認差上る秀吉公甚御感に預り関东者武案内
仕候得遊専ら軍用意而已也道及佐野旧臣と思
い^給送^り古^の志とふ族と思く尋来り
百余騎ニあふひり形る小田系落城ら多秀吉
公ヨリ天徳寺ニ佐野足利を添へ拾貳萬石ヲ玉
已り道及執事仕登きとの懇命天徳寺難有候得
^産遷俗仕らんも今更不中意ニ候宗綱娘^御人得
産^候得共聳養子被仰付^り被下と申上りる公も
尤の願ハ出あらば富田左近将監^り次男ヲ養子

ニ致さべし佐野旧領悉く宛行ふべし去り去る
ら幼少未をハ成長迄ハ天徳寺後見國政あるべし
と御暇^下旧領^下入部^母公養育姪女を実女と
し^て育^する真事^ハ智勇備^り多^る天徳寺也と
^不めぬ者^とて^あり^り以^り去^り程^ハ十八歳^ハ成^り
せ^ば入^部仕^らせ^度遊^道及^遊罷^走り公^允許^し
付^出沢^山城^守猶^又家^士步^卒等^引具^し路^次の^行
粧^花ヤ^り小^入部^息女^婚姻^との^ひ修^理太^夫信
吉^と改^め追^日血^氣添^増家^臣之^諫ヲ^用以^て天^徳寺
ハ^赤見^村へ^隠居^して^居ら^せし^り異^見在^しる^ハ

承引去く都る隱居所の近き所小世話有とて仙
場村へ追込儀絶て天徳寺へ是を歎き病氣と也
卒去る今ハ志る、方去く散乱甚し其中、秀吉
公御他界実父左近将監も病死旁々右心の俤乱
行有尤老臣ホも心有人ハ引込其頃富田源左衛
門ハ聲養子ニ姓ヲ給り佐野和泉守と号し井沢
山城守孫是も佐野内近頭と号し其外弓削長門
守内藤五左衛門中江川大膳太夫等也其節江戸
大火ニて唐沢の城ヨリ目の中下見ひるをハ駈
付御機嫌ヲ伺ひ去ハ首尾能らんとは血氣ヲ任せ

をしりらる衆長無双の強足成し余り強く衆
立ち行田之先ニて凡付死を其所ハ觀音ヲ建
て、今小阿り信吉ハ衆替ニ打乘り翌日益過小
着府登城有し小神君甚御機嫌ヲ損し夜前ニ出
火二十四里之場登城とハ如何して知ある哉と
て御尋信吉精しく居城唐沢ハ山高く候故目の
下ニ見下し候神君益御怒りあり將軍の左城ヲ
目の下ニ見お路し候とハ不吉千万端血氣強
驕之所行也城ヲ崩し平城ハ築屋しとの台命を
とく立歸り春日山江引落し普請成就有其頃心

詔を者と噂しける此城久しからし亡り築搦
り又亡りし移城あり誠不害千万先出^四る
神君退見と使ヲ以隱居此仰付^料小吉小家督下置
き候様小と七八ヶ条書立阿茶の局ヲ以て内奏
可る 神君甚御機嫌ヲ損し上使ヲ以て此城へ
召き信吉父子何心なく登りけるよ小園崎山小
御旗本の勇士輩^{四五}に忍び居て邊こころ籠りし信
州之今道松本少城主小預々給ふ春日山の城十
二日計しし城受取小溝口外記其外曆に御付
りて佐野騒動譬へ盈き様もあし奥方後悔せら

小益よし誠小婦人かしおく其家ヲ亡に眼前に
鏡あり老臣世評儀一迅まり和泉守に命ヲ重し
速小渡人と云内迄ハ生命を重んじ渡せりしと
洛^命人^命淡弓弓削長門ハ先年宗綱公の御代より危
き御家兼而格洛^ゴ之前未きハ各宜敷取斗ひ玉ひ
迎直小大伏と云佐野菩提所大廣寺小入住僧小
趣意を速潛代之主君牌^牌の前小く腹かき切て死
しかり誠小美深き老臣也形る城ハ和泉守下知
にて引渡し上使受取御墨印ヲ以て数万人歩を
搦日夜三日之間小城悉く破却元の野山と云し

河原河原より去る程小和泉ハ剃髪し山中仙舟と
改め土井大炊頭ニ隨ひ旧主公儀に對し異心異な
く血氣乱行家滅是悲本く候得とも悴とも召し
向され名改斗も御立死下候様と多年歎き訴
る土井より尤も元人ある忠義を子と折る言上を
神君仙舟の忠儀を感有之免許し呼功をべしと
の上意則ち大炊頭より松本江上使有仙舟も駈
り父又三人ヨ同道し源谷小至る所信吉卒中
風こゝ忽ち頓死を真予不運之次弟也菊子ハ
出府の処小神君御不例刺し御他界其後大炊

頭も病死旁々不幸而已續き亦る秀忠公御慈
悲ヲ以て小吉喜兵衛両子小録ヲ玉ハリ子孫
御簾本小勤仕有る

館林記卷之八

長尾諫臣江戸豊島之事

去程小曾根銘前ハ宗綱の首鎧太刀せ小長尾
ニ実檢ニ入進しハ甚悦ひ為家繁栄のもとしひ
備ニ筑前加軍切ふりと沓武畧ヲめくらし佐野
ヲ兼取屋し豊島七郎右衛門ハも恩賞を去ひハ
る今交佐野の大敵ヲ亡し多々賀酒を家士の面々

小賜ふ各々方歳ヲ唱ふ然る小謀士以戸豊島酒
ヲ受ふ可ら泪ヲをらくと流る長尾目早く見咎
めい可小豊島め出度折あらず落儀の祿ハ奇快
也との玉ふ豊島泪ヲ押て中らるハい可小得
其某とわいてハは友の義全く吉事とハ下憚むせ
は其其い已れ如何事進ハ小条家も佐野強敵も
るまし是迄南家ヲも立置作小宗綱亡ハ候得ハ
小条方と軍違ふし此上南家さハ亡し候得を野
羽追手小入中問嚙悦ハころ候事然る南家長久
の計らへこそ專一と中らるハ長尾以外立腹

有汝の中處不吉の至り罷り去る事と有しあバ
豊島をこく立去て後南家久しあらず其時後悔
左盈しと一通ヲあわ残し行未知る失せしる
智謀の程杯神妙亦利

小田原勢衆向扱の事

去程小天正十六戌子八月館林切志とあひさる
小よ川て佐野へ往来も不自由な事大軍ヲ以て
切破るべし若要害入已しく落城せも智畧ヲ以
て和談も盈し評議一決して氏直叔父小条美濃
年氏親ヲ大将として扱部岡江雪斎朝倉能登守

其外の軍將大軍ヲ以テ押寄る館林も毎度の小
田原勢さし多るるも有登あられとハ出た大軍
の聞ひ有しハ隨分才略ヲ廻らし種々軍用意ヲ
備ひ數度合戦ハあよふ其上士卒強勇ふし々軍
將又智謀全ルきハさしもの小田原勢貴欠て屯
在しく三拾余も滞陣ある處ハ深谷左京とて軍
書ハ達し治乱能弁する謀士氏親是ハ密談有之
其神策を尋しハ左京中なるハ抑當城ハ要害美
どりハ攻懸り難く佐貫氏代に貯ひ置たる兵糧
矢種さうハ不足さし君臣能合群し四民又よく

去つて恩深小命を惜ま及去り依て計畧ヲ廻し
其上是神之城地人力の及ハざる処なり只寛仁
大度の神策ヲ以て城安全兩家和睦國家靜謐ニ
御謀る社宣敷ハと申する氏親是ヲ聞くと一々至
極セリ然る手段有や左京承り幸哉赤岩山光恩
寺住僧良重法ヲハ某しハ俗縁有るハ罷越頼候
半と則罷越段ニ年舌尽し頼ニルハ法ヲ此中
ルハ兵を凶番ふし々國民ヲ苦患志川むる不
便也迎門役者衆教輩召し連館林之城ニ入此度
小条家より扱ひ和陸の意趣を毎年大軍ヲ以て

國家靜謐の其上、天神應護の名城、人力の難及依
て和陸家家交を去し、國家の政事相談に及度、
然る上の籟下の面白、追聊誰に替るる、亦く長尾
殿任せ、多る登しとのり、弟家の御本望、何の是に
去り人、や國家全、万民快樂の御良策、是に過とる
御事有、登り、はと并舌、尽し進めし、は長尾之
運の是、処にや、則領掌あり、互に會盟あり、早速陣
拂し、は城あり、は四民万歳、は唱り靜謐の世と
成り、は其後、小田原大道寺、駿河守政繁、松田肥
前守秀範、西使し、は館林に、は糸着、其趣、今度、和陸祝

着せしむると書、笈に送らる依て、白石豊前守大
畑治部少輔加藤形部少補三使、は以て、小田原へ
返礼有、小条家急て源策あり、は付種、は饗應有、引
手物山の如く、はして、はるされ、はる夫より程、亦く
坂江部、は以て、は雪青入道、山上門左衛門尉大妻、は三郎
等、は以て、はお香をと、は是、且先年、由良殿相、は生之、は強
敵、は亡し、長尾殿、依野家、綱を討取、給ふ、は軍功、は驚入
り、は也、依て、は此度、由良殿、は小、は西上州、はより、は信州
道、は征代有、は登し、長尾、は小野、は初より、は常陸、は道、はも、は發行
有、はべし、は加勢の後、はを、は何時、は成、はを、は仰せ、は越、はる、はべし、は多、は少、

寄給御望小任去へし且又將こハ数年戦場
 已御心小掛ら進出する事ハ多つて故城興之事
 是有間敷小田原之義と北辺小田原を海上之眺望
 御目小懸一献汲か已し一入新合無二之會盟を
 梁之度候猶委細ハ使者江雪斎古今秀多る年舌
 和漢の古事胸中小おさめ多る老士亦多るハ兩將
 其心ヲと希同道せんと用意有願下せ謀む事と
 運の及ふや何乃思慮も亦く小田原に越く要
 兩將ヲ一間江押込郡邑の太夫として大國の諸
 侯小對し数年尾籠之至り其上近年驕奢之跋急

度申付了所也無滞城地ヲ差出さハ一命ハ助け
 及し矣儀ハ及まは刑罰ニ以て不盈しと云渡を亦
 將無念骨髓ハしてつし北邊江戸豊後ハ謀言今思
 ひあり後悔更ハ益多し館林の城ヲ美濃守氏親
 々給り家臣南條因幡守罷越城受取城代在友長
 尾之奥方ハ足利江落行くと衰を成り有程也館
 林藩下ハ勿論小曾根ニ階堂始沢入々谷某師事
 ヲ始悉く小田原ハ勤仕する社無念ホリ

長尾但馬守滅亡因縁之事

叔も長尾但馬守顯長館林の城主として已行

小七雄の頭の身のして大國の諸侯小糸家と威
ヲ争ひ落城せさりし程に武刃の志をみくと計
畧を落入滅亡の及ひ多る武勇の拙き可ら是
天命の背き大欲心の本心を忘れ天神地祇別る
兩社鎮守の不見放を給ふ故もあらし其故ヲ尋る小
赤井文六照景臣因幡の爲に出國有是を爲城
とせんと義兵ヲ揚終に因幡ヲ討取館林ヲ取返
ししり此時文六を呼ぶし佐貫氏に敗れと赤井の
家ヲ継せ長尾後見せハ兩家をあらつた多る里繁業成
登き小さくくしし旗下諸士ヲいつじり館林ヲ押

領阿子川さし文六成人の後仇をせしハ何率失た
已んと工夫ヲ廻しル長尾奥方ハ文六の姉を
せしハ是ヲ悟り急に密に母を方へいしハ文六に
小ハ出家沙門とすし父に菩提ヲとむらせ給ふ
登しさくくく俗体をあらわせあらはしあらはしあらはし
起りあらひ有べしと有りハ母公驚き赤岩村先
恩寺法師の御弟とあらしし下野房と改め親門に
入る小さく長尾も今ハ必心易しと捨置ら然る
小ト野房親門に成らすいとをあらし館林城先祖
代に居城也是非取返し先祖の武名ヲ顯さんと

武道修行の心をよせ兵法弓馬早業懈怠なく誓
古シタリし其器量手に立者なく身の丈六尺
小余り殊に美男にして往古に牛若丸に習へて千
人切を志して鞍の程を例し見んと夜に辻切ヲ
志ししよりし夜陰に往來もゆる程也し可長
尾此事を聞き討手ヲ向とりしるる小をやくも
知^知む者有て館林の地を^ましり出宇都宮ひ尋行
宇都宮跡五郎ヲ頼し^所聞及し赤井之正流先對
面せんと呼出させし小身の丈六尺小余り大男
自然と大将の威風有て誠小一騎勇士の士あり

お館林落去之沢委細小尋らま一先ツ^我方と安
り玉ひ後こ計畧^巡らし本國へ帰城も力を添中
さんと懇意に次才忝しとて逗留其頃宇都宮
と結城晴朝と常陸の少田の合戦最中赤井先陣
をのそりて軍毎に校群也依て合戦毎に旧居の
上小立城主跡三郎甚に賞翫有て五千貫の地ヲ
よひら丸秘藏他みことありり其上徳次郎と
云所小搔揚ヲ築領主小志し玉ふ赤井多年の願
望成就に依る館林の旧居に急る志有^志ハ呼集
め更小不^不是のりなく頗る館林ヲも棄取んと種

と計畧を廻らさるる所は思はぬ災難出来よ
りり宇都宮城下ニ押切と云知は富貴之嬢嬢め在
夷人の娘ヲ以て此娘容色世に勝る翠黛紅顔更
小類ひおしあある已ふらば財宝藏とて川深窓
小養をきてまみゆる小希ふり然る小如何ある
過去の因縁よや丈六勝連の美男よ互に思ひ合
せし川志の比翼のうららひをおし程なく只赤
らぬ身と成有又宇都宮家臣戸祭豊前守を好氣
第一の男殊に一老の権威甚敷彼寡女ヤメの娘ヲさ
しおきしる小豊前守聞より余念なく何ふ世し

才覺頼む也と黄金ヲ一枚出し先弟座に下遣遣
しりる彼者祝ヨロコブひ早速寡女か方カタに行くと戸祭豊前守
殿息女貫ひ未とも更方小致さるべきとのる真
る小本望に羨早く御受中べしと云はる母ハ
是を聞て成程忝き子コを候得せ一人娘のり小
候得を入鞆ヲ取揃り子に致し度ト一向御免所
きと中りる彼者聞て是ハ以て外ソトのりる小豊前
守殿ノ方ノ成比得ハ是ニ増マとる聲コエや候應オコき其上
左様小候得ハ早速所ヲ辨ワ己速ハ乞食イタク小あるあら
人明夕方迎ムカの駕籠カゴヲ差遣ハさん早く支度有る

下しと云捨て偽りりる母は是非去る娘は却と
語りりる小娘ハ聞よま物ふさるまあまにああ
ら小立りるあ此る勝連方ハ文外不認め遣しりる
ハ勝連驚き其夜欠来り是ヲ聞此上ハ是非あし
今宵連て立退人男初まふまふさ白を替ひ乗馬
小のせ戸鯨ハあま偽りりるハ深く密あし居
りりる母ハ跡に驚き館肝煎りを呼てあ
人の祝や幸れハ夫より八方子分しとさあせ
と行方あきけ豊前怒て何者あせま遠くハ行ま
し近隣をさあまべし旅人在者ハ褒美のそと

任せんと國光の勢ひヲ以て料を~~取~~て尋し小
赤井の仕業たる戸鯨小隠し置よし聞付大い
きとありまあきあま勝連武勇~~不~~こり教代軍
切の旧臣をまひあしろまするま~~ま~~ハ國敵と
思ひし小輩ハ武討亡し女ヲ棄ひあひさんあ芳
賀左衛門仇の勇士五十騎軍卒數百人差添戸鯨
ハ差~~遣~~遣は勝連ハ~~急~~急用意のそま~~ま~~ハ門戸を堅
め待居まり討手の者とも押寄関を作る搔揚
とも同く関ヲ合せ火門~~知~~知らり切て出火危ちら
し戦りる寄るハ入替く責りるあ赤井の從卒

林

疲を果て起るむ所小勝連黒系威しの大鎧龍頭
の甲麻毛之逆物ある馬小乗り八尺の鉄の棒の
多くと引提キリテいゝ子戸祭の弱兵を物くしや名乗
も亦このまじりなき赤井之正流勝連爰在此捧を
受て冥途の土産も也よと七ちう八横聚散離合
之秘術を尽しいつの時おる秘を盈しとをらり
久と去き倒る暫時之間小血ハ塚麻の川と去り
骨若屠所の山ヲつむ芳賀出乃よしを見て一騎
討ハ無益也射手を揃ひて林林取と強弓の多
き矢を揃へ射懸あり赤井の良芋主を射させ

て叶ハしと一度子とつと切て懸る詰掛らせて
矢軍も去り難く又打物にて攻戦ふ討の打きつ
死人ヲ乗越る肩ヲ捨て切結ふ勝連今ハ是迄去
りと拾九才の妻ヲ差殺し障子ツバサ楔ツバサヲつと重火煙
と赤し鷲托細道より日光山の方へ落行ルる又
道の早も子翼ツバサ有ツバサ小似り万人の及る赤し其行衛
を一生知れと去一説は焼死しり共云然然今御
旗本に赤井同家可可又又幕府小勤切あり懸案を
る小勝連日光山林小隠を孫出府をる是れ
已起まひあとし後人詳詳あ小記し玉玉神君御

在世に府御物入の砌り関ヶ原名家の裔子ハ
出登し召出以居しとの大友によつて旧家の子
孫各と出世赤井氏も此時出府ありふりしく

館林記卷之九

上方勢館林發向之事

病も天正十八寅三月太閤秀吉公小田原責軍將
手分しし関東山条持の城に責王ふふ一城とし
て落るとゆふふし秀吉の武威雷行の激もる
如く恰も飛龍の暴虎の荒る勢ひ人力の防り
及び難し相州^其平織の城主山条一族左衛門太夫氏

勝降系関ヶ原内者として江戸佐倉公^士政本金藤

南羽生私市関宿悉く落城す館林も五奉行隨一

石田治部少補三成大谷刑部少補吉隆長束大

藏太補正家速水甲斐守^其堀田圖書助勝喜野

村伊予守種春中村式部少補有能伊藤丹後守

祐実中島式部少補氏種松浦安太夫宗清鈴木孫

三郎重朝等大軍を率し四月廿四日より道この

城を攻落し五月廿四日館林へ着陣石田速水

松浦^其兵とも七千騎早川田を越佐野口より攻

入大谷堀田鈴木以下降^其合て五千騎加法師口

ヨリ攻入長速野之村中島伊藤降兵共六千余騎
出稿碑木口より押寄る三方此大軍鐘太鼓ヲ打
て関ヲ揚誠ニ其音山谷ニ響き近村を郷々婦童
肝を消し魂ヲ失ふると驚き騒ぎまよふ計也南
条因幡守籙下の軍將ヲ集め嚴重ニ備ひヲ示し
防戦を三成城辺を吸見して此城三方ヲ防ぎ東
南ハ大沼ヲ多のんて防兵屯ヲ依て沼中ニ
道ヲ付衆入登し人夫歩を出し郷民貨錢ヲ与ひて
遣ふ登し大木を投入在家ヲ出不して其上ニ出
ヲ置三日の中ニ出来以明日で惣衆して一散小

責入らんとな夜の明るを待居ある小城兵ハ沼ヲ
頼り小防兵亦人只三方を堅めよと人数割を志多
りしあハ餘後所後く小残兵少く都る軍の習ひ人増
時ハ勇氣盛ん小也少しも滅滅する時ハ勇氣忽ち
おとろふる習ひ亦是ハ落城も程ちあしと到る
りきり然る如小夜半の頃い川くとも亦く数
万の明松出来り夥敷人歩道ヲ破ると見ひル是
ハ敵も身方もふしんヲ示し夜明て見事ハ築立
し二筋の大道沼之中ニ志川ニ入り跡亦も亦く
消へるせし社神妻寄採といふも亦余り有城兵

ハ蕪生志とる心地し寄まハ数万の人歩忽ち精
力消失ておききまてある計り也就中石田驚き
氏勝ヲ呼ぶ城の沼ハ古しより寄瑞とるま
有しや氏勝来り去ハハ北城ハ赤井照光稻荷大
明神の灵驗みて築則ち尾引の城と中あり小田
系よりも三度小及攻ゆ得百種この事^異変あり終
小落城未く扱ヲ入計畧ヲ以て棄取候此度寄瑞
も稻荷の神変ありと存候夫ニ付某方便ヲ以て降
系致させ中へしと云石田聞て夫ハ何よま深切
何卒智畧を廻しゆハ氏勝心得ゆ也立廻り書状

細くと認南條ヲ始め旗下ともへ送らば乃ち誠
小天より降を所々大將軍是又^敵南ハ天の普也先
祖旧家の新絶大不幸是もま今殿下之氏勝
如きの氏族も降系美濃守殿御為りも成りま
早く城を渡し眼前の妻子の苦患をましくし玉ひ
是則ち天命も^シ隨ひ忠幸全^可取也と書連しは是
ヲ見るより皆一同に帰依し五月廿九日関城志
ハらく大関の御持城とあり小市利

榊原式部太補館林城主之事

おも小田原落城関八州 御徳川神君御治國と

也其切ヲ以館林を榊原式部大補康政に給り入
部立城有然ハ小糸家臣南條代ハ小寺丹後青山
出雲商人ヲ町檢新ニ定メ置きて田ヲ与フ小榊原
も先例の通り商人勤メ屋ミよし中付ラ康
政病死息遠江守康勝家督町支配檢新計リ而
ハ届キ難キ年寄七人各ク筋目多ク及者及中付
らシ今ハ相續シ慶長十九年大坂御陣康勝も供奉
之節檢新年寄七人歩卒シ供致シ兵糧未等々
と役ヲ与ス北時大和川ニ康勝軍切有 神君
御褒美ヲ賜り元和元五月再乱之節御供岩田ニ

る木村主計と合戦首七拾余級ヲ得て御感ハ預
り同月京都逗留中病死ハ時ハ武拾五歳也實子
亦ハ兄太須賀出羽守忠政と号シ在城ナリよハ門
て國家静ハ寛永八年末の九月十九日大洪水川
僕早川田堤押切武家相人馬命ハをハとハ是
天災志のき兼ハ同廿三日町市日ハ商人近
廊より集り賣物ヲ与ラべテ穀集ヲ何國ニ亦
くハさハ山伏金剛杖ヲ突大具ヲ吹立来りて
いハ面ハ油断ヲ城主式部大補殿謀反企
て有リ無矢のき人者ハつて無ニ切腹ヲ

謀反人の郎等去るハ家士撫切みせしとの仰
せり討手ヲ承り則ち井伊掃部頭永井美作守
等大手の大将として川優通リ責寄る又奥平美
作守あらめての大將として早川田通リ大軍を
率して夜を日ニ継て城兵之不意ニお寄備ハ
去るを以テ衆入らんとおやあ川を越せ去るを
うく財宝を片付妻子何方ニ可退きよ焼打あら
又成ふらむ残家ハゆめし其上近代をやる石火
火矢ふと、去もの打きあバ肝魂もきびぐと去
る氣を失ひ再反死ん不便さよと云ゆる程こそ

何市市中より騷立町中上ヲ下ひあひを金銀ヲ
首ニ掛老人幼少を引合左辺ひ逃るも何り家
財雜具をかひ出し車長持引ちらし八方一度
小騷立行あり突勇踏倒し踏殺し泣さる子声
耳のあむり去るさらし聞分以時み得ると盗
人飛入て盗取夫ヲ見て追欠つ可み合切合拾八
町之裏表騷ぬ所ハ去りルリ無程此事城中ハ
聞ひ是只る小何ら油断多下り何ら以として
城門を固メ防兵を配リ役所定め甲冑を侍り持
て弓鐵炮鉞鋒を提ケ待懸とり形る処ハ物見の

武士駈来歎き南川ヲ渡リ大旗小ちく天に召る
ふひり野山廿地も亦く歎充滿と許る取の家
士奴僕薪取小山林へ行くる者世大河ありて
悔り悔りあり泣き交鎧武者雲霞の如く出来て踏
倒して押通り誰にも踏殺され我々の身に命
をあり助ありと泣く中なる城兵あり多あり
ひふしと城ヲ枕し多あり外有屋あり以甲冑を帯
し矢策をとり玉菜ヲ込んと待居り妻子ハ兵
糧之屋く灰骨ありしと持運老人をよろ不ひまじ
り幼き子ハ泣き帯ひ泣き眞る不不意お出る異変

あきハ其騒動多しといふ可きもああり然る
所晩景至て何と亦く世上あままりは道ハ人亦
き城より亦く亦くは不思儀と又使番ヲ駈付見
きハ旗も軍勢も跡方も亦く薪取不行し僕友之
只忙然と氣ぬけとありてう泣くと立居る館林
中之四民眠らばして夢中不似たり面々正氣ヲ
考るのみ誠と大災北上や有屋も我城主急飛札
ヲ以て訴ふ所ハ江戸安泰聊も異変未し依て城
主ヲ始め大小驚き是弟家之不吉の先表拂神の
あふこい寄らんハ亦く難種大願祈誓可也

て後何の別条ありし明る寛永九年甲申歳小桑原
西小山小富士の神社ヲ建立あり安行角之魚石
原左衛門兩人奉行ニ出末迄とて同十八年
城下谷越町小鎮座有所の青梅天満宮の社地不
足成連家士三宅利右衛門屋敷をこふちて加へ
入宮殿造業ある加藤甚内奉行を谷越町へ大門
ヲ向け玉ふ正保三甲の暮奥州白川江所替跡ハ
御番城と云り織田因幡守太田系佐兵衛尉前田
右近太丈代リと相勤る御代官設樂長兵衛支配
す

館林記卷の拾

正保二酉年松平和泉守兼基城主と也入部の廻
小桑城を代々稲荷應護の灵地を承けハ即刻に社
系勇家之安全ヲ祈り給ひと町長を訴ふる小
やぐ我此城拜領之上を神よもせよ佛ももせよ
地主ハ象承進ハ借地の方より至一禮有る子也
何より此方より至集る魚石といふ事ありと捨置し
或時江戸表より急飛を也来り御奉書ヲ以て急
き謁見すると今度若君家綱公御痘瘡御大切也
急き系府登城御機嫌相窺中屋くの箋也和泉守

殿取河へ以早馬にて着府あり屋敷江集込玉不
小老臣を始しめ家士驚入子細ヲ尋ぬきハ和泉
守不審此を以先癒瘡之ヲ尋らるゝ小跡ありとも
あきり也是ハいりり之御奉書取出し披見有
小文字ハあくく白紙より大小あり北沙汰あく
も以外ると夜中よりく城に

私小曰く此節和泉守板橋の駄追至着有夫よ
り使者ヲ以て月番の御老中阿部豊後守へ差
遣ハ去板橋追駄追唯今至着仕候押付着府之
上御機嫌伺候多め使者ヲ以て中上水と有之

候如一向小跡方も未きりる若君様益御機
嫌能御座あききりど人豊後守より返答有之
大小驚き為持小狭箱より御奉書取出し拝見
可らきり得ハ巻白紙也とも云傳ふ河邊是あき
り并いりり此程本書をて見ひきり得在承
り傳へりり有愛小記を

是全く神意之智めあきりと稲荷大明神へ社系
種々御説河川に御修覆ある處に連中付り其
上谷越町青梅天神木挽町愛宕神社も御修覆可
るべしとて万治元戌年息宮内少補兼久家督有

其年七月大變在城の東南沼端の方都ラ要害悪
し賣拂代取^レしと下知立し^レ在村之長ト飛タんで曰
是ハ山神の森ニし^レ祠地あり御免可キとカハ
以是^レ水野赤んを神木あらん城主の要害とせ
ん予聊^ク神慮ヲのと^ルめ有^ル盈^ルう^ル以^テ川ノ僕^ニ金子
太兵衛羽根田村玄番兩人買取悉く切拂へ利根
川へ出し江戸へ廻し高木と赤さんと山の如く
積置七月十九日國老仁右衛門家政ヲ執行志^ス
る予己の刻より俄に空をき雲り鳴動タびタ
なく是い^ハありると館林中の人々肝を消^ス所

小躑躅ヶ崎今以城の東の沼をさしつちの在
古本数百本今有

大沼高波打て水を巻^リけ黒雲舞下り沼の面圍
夜の如く大風吹落て黒雲登るといふや車軸を
ま^りし大風雨人家悉く巻^多をし吹^多まし人馬
命を失^ふり其数多かり^き中^もも不審也しハ水
野仁右衛門居^多の上ヲ黒雲舞下りて妻子家来
半死半生長式人散^る小引さ^る連家根も多^をれ
散乱在家財雜具ハ新田の金山足利の大岩赤と
云所小落有^を死^後へ来^りしと^る又仁右衛門
右徳尾崎小左衛門仁右衛門宅ニ^も氣絶し病人

とあり又積置とる大木は一本もなく失ひり
川俣太郎兵衛も仁右衛門宅より逃帰るとして道
りて黒雲の包まきて氣絶は其夜死去を玄番も
半死半生に成てその節高根村の田舎反程植付
に儘さらつて山の上の町あり不審ある此稲
実のり来と成て城主に捧けり奇妙あるハ以
戸濱屋敷も勇日龍巻倒しりると来世と云々神
國の事は何ぞあるやんや後人恐るべし寛
文丑年某久下総の佐倉へ所替跡御城跡と成織田
内記大関土佐守下曾根三十郎等即り

館林城公城とある事

寛文元年丑年 將軍家綱公の御連枝參議右馬
頭源綱吉公の御居城に相定り御普請有之上野
之内拾七万二千石御領國と成牧野備前守曾我
因幡守金田遠江守其外諸士百家旗本小徒人陪
臣の奴僕數万人軒ヲ去ら登て又往來の人々以
ちくとり御本丸殿室ヲ始め二の丸三の丸大名
小路より城内外に居余りて加法師土橋丸屋敷
又町裏荒宿の先迄同心小路割ふら登館林の繁
昌成斐ふとい人々ハさら小江戸の全盛小町と

しあら人々御城下万民萬歳の声みちくさり時
小延宝八申年小御養君小御歿り五月八日江府
江入衛御治有弟城々若君徳松君御城主ニ備
ハリ玉小綱吉公館林ハ始テ入部日光山より御
帰之節五月九日御城不入御本丸ニ止館あり其
節御目見新田大光院谷越町善導寺御時服拝領
其外茂林寺普濟寺善長寺惣徳院五寶寺4教王院
奥藏院何きも白銀式枚宛頂戴小寺市重郎青山
四郎右衛門同久兵衛中井勘九郎等罷出る弟所
古老有御尋加ニ見淨心罷出旧記ヲ以言上也

館林破城之事

御城主徳松君万々歳と士農工商朝夕祈り奉る
とゆふともいふ事御果報ニヤ御繁昌去々天
和三年六月廿八日御早世上々君臣より下万民
追闇夜々とも志ひヲ失ひ又盲人の杖ヲ去水
ふる心知こしこ十方ヲ失ひあふし泣声而已
て飲食とも不快眼も其上悉く御城焼失きい人
として目前小来々有為轉世の習へといふ事
あら浅間こかりこ事也貞享元々年新田畑小
被仰付諸星傳左衛門右黒小右衛門小笠原七郎

兵衛御奉行として知行高七百石命と成在家
水呑共小御割渡し被成下御代官ハ諸星傳左衛
門同三年稲彙年右衛門預リ高三万五千石余大
谷原ハ御手代清水清右衛門小林孫太夫分て預
リ文配元録四年御代官又替リ深谷忠兵衛同
五年より池田新兵衛同九年より同九年より比
丘長左衛門同十一年より臺宿町裏代官屋鋪ヲ
置て手代為人置水方役人常ニ住居以同十五年
城跡御見分ニ奥田八郎右衛門鈴木修理御檢地
有之

館林の城再興之事

將軍家宣公御代室永四亥年館林の城松平出羽
守江城被下再興立城仕屋子よし御加増拜領此作
付丈より普請始り往古之圖を以て繩化期月を
以て築立荒増成就城主ニ備り右近將監と改め
文昭公御同享保九甲辰年病死養子肥前守尾州別家
判東早世又養子源之進水戸別府三男改て主計
頭再改右近將監享保十四酉年二月奥州棚倉江
河替跡太田備中守城主と成給ふ延享三寅年右
近將監御老中ニ御付同四卯年旧領館林へ再所

尾州別家

替此作付御役三拾四年勤切安永七戌年病死六
拾四才也嫡子久五郎後主計頭再改右近將監御
奏者此御付天明四辰年病死嫡子久五郎家督有
寛政九巳年十一月將軍有公御目見へ此御付右
近將軍と改め追日館林繁栄并四民共お隠也館
の字官ヲ舎いぐる意有不宣とニ儀右馬頭綱吉
卿思召しヲ以て館小書改め候様とトの御小よ
川て食扁小官と中文字小書改め今以館林の文
字小書習ハスるトありぬ

右近將監天保七甲三月石川瀨田以而替跡井上
河内守正春公奥州掬倉より移在城ヲ引移後為
三年大坂御城代御勤其後西御丸御老中御勤有
之弘化三年年遠州濱松以再御而替跡城主羽州山
形より秋元公

右昭和七年七月南條金雄氏ヨリ
借受寫之







